

ミラノでオペラ

野瀬 隆平

ミラノに赴任して間もなく、家族もまだ来ていない頃である。

事務所の女性所員、パトリシアがオペラを聴きに行かないかと声を掛けてくれた。演目は日本を舞台にしたプッチーニの「蝶々夫人」である。もう一人の所員も一緒に、車でミラノの郊外にある小さな町の音楽会場に向かった。

オペラと云うから、オーケストラの演奏つきかと半ば期待していたが、ピアノ一台の伴奏で歌劇は進む。

終って、暗い会場からホールに出ると、パトリシアが目を赤くしている。どうも泣いていたようだ。こちらを見つめながら、「ウオモ・ケ・ブルット」とつぶやく。「男って、酷いわね」くらいの意味だろうか。蝶々さんに感情移入して、騙したピンカートンという男が悪いと感情をたかぶらせていたらしい。

オペラといえば、ミラノには名高いオペラの殿堂「スカラ座」がある。

一度はここでオペラを鑑賞したいと思っていたが、やっとチャンスが来た。上演されるのは「オテロ」である。筋書きもよく理解しておらず、惜しいことに感動を得られまでには至らなかった。

ただ、スカラ座の中は、外観からはとても想像できないほどの素晴らしさで、その時の感激は今でも残っている。

もう一つ、忘れられない思い出がある。ミラノからロンドンに転勤することになり、明日移動するというその日だった。知人から、「ヴェローナでのオペラの切符が二枚あるが行かないか」と。

急用で行けなくなったようだ。このチャンスを逃したら、二度とヴェローナでの観劇など出来ないだろうと、有り難く頂くことにした。

ヴェローナへは、ミラノから列車に乗り一時間半ほどで着いた。オペラの会場は、アリーナと呼ばれる 2000 年も前に建てられた円形競技場である。

会場に着いたらすでに満員、開演を今や遅しと待ち構えている。いよいよ、「ラ・ボエーム」が始まった。聴きなれたアリアもあり、筋書きも知っている。

すっかり酔いしれて、アリーナから夜風に吹かれながら駅へと向かった。

注：ウオモ・ケ・ブルット Uomo, che brutto.